教育学者のあたふた子育て・親育ち(4)

子どもをもたない保育者の専門性とは(2)

佐久間亜紀

「佐久間先生には子どもはいないんですか?」

教育関係者の一人として仕事をしていると、しばしば、私自身に子どもがいるかどうかを尋ねられます。先月号では、まだ私に子どもがいなかったころ、この種の質問をされ、当惑した時の経験について記しました。当時の私は、「子どもがいないあなたには、教育のことはわからないのではないか」というたぐいのことを陰に日なたに言われ、女性としてだけでなく、職業人としても、存在価値を丸ごと否定されるように感じる経験を重ねていたのです。そして、それらの経験が、子どもがほしいのにできないという悲しみを、いっそう深いものにしていました。

ところがどうでしょう。いざ自分が出産して子どもを保育園に預けるようになると、私自身がふと「あの先生にはお子さんはいるのかしら」と考えているではありませんか。これは、私にとっては天と地がひっくり返るような、驚愕の経験でした。なぜ、私も含めて多くの人は、自分の子どもを見てくださる保育者に、自分の子どもがいるかどうかが気になってしまうのでしょうか。そして、子どものいな

い保育者の専門性は、子育て経験のある保育者の専門性よりも、本当に劣るのでしょうか。

もちろん専門性は劣らない

冷静に考えればすぐに、「子どものいない保育者の専門性は、子育て経験のある保育者の専門性より低い」とはいえないことがわかります。子どもたち自身にとって何より重要なのは、毎日の生活の中でどのくらい「わたし」の心が満たされるか、あるいは、先生がどのくらい「わたし」に向き合ってくれているか、でしょう。担任自身に子どもがいるかどうかなど、子どもたちにとっては直接の問題ではないのです。

考えてみれば、保育者自身が子育てを経験したからといって、自分のクラスの子どもの願いにきちんと寄り添えるようになるとは限りません。また、さまざまな保護者の、さまざまな思いをきちんと受け止め、適切に対応できるようになるとも限りません。

逆に、保育者自身が子をもつ親であることが、結果として保育者としての専門性にマイナスに作用することもあるでしょう。たとえば、保育者自身が自分の子育てに追われて疲れ切り、クラスの子どもに向き合えなくなってしまえば逆効果です。また、あるお母さんは「うちの子の担任の先生は、いつも自分の子どもの話ばかりして、いつの間にか先生の話を私が聞くことになっちゃうの。肝心の私の話は全然聞いてもらえない」と嘆いていました。

このように、保育者自身に子どもがいることで、保育の質が高まる可能性もありますが、その逆の影響を及ぼす可能性もあるわけで、保育者自身の子育て経験が、保育者の専門性を支える必要十分条件になるとは、考えにくいのです。

当事者性への期待

では、なぜ、親をはじめ保護者は、保育者自身に子どもがいるかどうかが気になってしまうのでしょ

うか。おそらく大きな理由の一つとして、「当事者性」への期待が挙げられるのではないかと思います。保護者は、毎日子育てと格闘している当事者です。もしも担任の先生が同じ当事者であれば、「少々言葉足らずでも、この気持ちや状況をきっとわかってくれるに違いない」と期待したり、安心したりできるのではないでしょうか。

確かに、この世の中には自分自身で経験してみないとわからないことが、たくさんあります。「話を聞くのとやってみるのとでは大違い」であるのは、あらゆる事柄について共通していえることでしょう。しかも、経験してみて初めてわかる事柄は、往々にして体感的要素を多分に含んでいるため、うまく言葉で表現しきれない内容なのです。

たとえば私も、「一日中赤ちゃんのお世話に追われる母親の苦労と孤独」なんて、自宅のトイレにさえゆっくり入っていられない状況を自分で経験して初めて「こういうことだったのか！」と痛感した一人です。孤独感に苛まれた私は、夫に「早く帰宅してほしい」と懇願したのですが、夫から返ってきたのは「亜紀は一日中、赤ちゃんとモモ（猫）と三人で一緒にいられるじゃないか。一人きりで仕事をしているのは、むしろ僕のほうだよ」という言葉でした。もちろんその後、夫は早く帰宅してくれるようになりましたが、私の孤独感を説明しようと言葉を重ねるのには、大変な努力が必要でした。

一方、近所の「ママ友」同士では、話は格段に楽でした。もちろん同じ当事者だからといって、ママたちの経験は千差万別で、いつも私の気持ちを理解してもらえたわけではありません。でも、相手も同様の経験をしている場合もあり、言葉足らずの表現でも「そうそう！」と言ってもらえて「伝わった」と実感できたり、「私だけじゃないんだ」と思えたりした時の手応えは、それだけで大きな支えになってくれました。

このように、子育て真っ最中の保護者は、当事者

性を共有することのメリットを経験しており、無意識のうちに、保育者も親であるかが気になってしまうのだろうと思います。

当事者性と専門性の違い

ですが、だからといって親が保育者に切実に求めているのは、当事者としての感覚や経験の共有ではないことは明らかです。それだけなら、親同士の会話があれば、充分に事足りてしまいます。保護者が求めているのは、子どもの生活や成長をしっかりと支える保育の内容であり、そのために必要な保育者としての力量でしょう。保育者の専門性と、保育者自身に子どもがいるかどうかは、別の次元の問題だということを確認したいと思います。

たとえば、障碍をもって生まれたわが子を受け入れられない母親がいたとします。この時、保育者に真っ先に問われるのは、「その保育者が親かどうか」とか「保育者の子どもにも障碍があるか」ではないはずです。問われるのは、その保育者が、目の前にいるその母親にしっかりと寄り添い、共に歩もうとすることができるかどうかのほうでしょう。

もしも、保育者自身の子どもにも障碍があり、「障碍をもつ子を育てる親」として同じ「当事者」であれば、その母親の信頼を得やすいかもしれません。でも、当事者であるというだけで、その後も信頼を維持できるとは考えにくいです。その後の生活の中で、世界に二人といないその子の求めに応じた、保育者の専門的なかかわりがなければ、親の期待や安心は、簡単に落胆や不信へと変わってしまうはずです。

つまり、保育者の専門性として問われているのは、保育者が自分の子育て経験の中で培ってきた知というよりも、その保育者が子どもや保護者に寄り添う経験の中で培ってきた知のほうなのです。自分の子どもに障碍があるわけでなくても、障碍をもつ子どもに豊かな保育を実現し、その家族もしっかりと支

えている保育者は、本当にたくさんいます。当事者性と専門性は、保護者一般からは見分けにくく、混同されやすいですが、少なくとも保育者や教師の側からは、きちんと分けて認識しておく必要があると、私は思います。

別の何かを経験しているということ

「でも」という読者からの声が聞こえてきます。「でも、やっぱり子どもがいない保育者よりは、子どもがいる保育者のほうが、質の高い保育ができる可能性が高いのではないでしょうか?」と。

この問いにも、私はやはりキッパリ「いいえ!」と答えたいと思うのです。

実は、コウノトリを待ち続けていたころは、私自身が「やっぱり子育ての経験がないと、私は教育者として劣るのではないか」と悩んでいました。でもある時、夫がふと、「何かを経験していないということは、別の何かを経験している、っていうことじゃないかな」とつぶやいたのです。このひと言で、目の前にあった霧はスーっと晴れていきました。

子どもをもたない保育者は、子育て中の親という当事者性はもちません。子育て経験の中で自然に培われた知恵や知識がないせいで、子どもや保護者の思いに寄り添えないかもしれないことは、確かに、ありのまま受け止める必要があるでしょう。でも、子育ての経験があろうがなかろうが、子どもや保護者の思いに寄り添えないかもしれないのは同じです。いずれにせよ、他者への尊敬と畏怖の念をもち、子どもや保護者にいっそうしっかり寄り添おうとする姿勢をもてるかどうかが、専門家として問われるところでしょう。

その上で、子どもをもたない保育者は、別の当事者性を生きていることを、堂々とありのまま認識すればよいのだと、私は考えるようになりました。たとえば、不妊で悩んでいる保育者は、子どもを授かることがどんなに奇跡的なことかを、身をもって経

験しているということなのです。その立場から、たとえば障碍をもったわが子を受け入れられずに悩む親に対して、「どんなに重い障碍をもって生まれてきた子どもであっても、生まれてきてくれただけでどれほど素晴らしいことか」と語れるかもしれません。二人目不妊の親も、そういう保育者になら、悩みを打ち明けやすいかもしれません。保育の現場で生きる可能性があるのは、親としての当事者性だけでなく、別の当事者性もあるのです。人間は皆、さまざまな当事者性を、重層的に生きる存在だからです。

ありのままの姿で生きる

こう考えてくると、人間を見るまなざしそのものも変わってきます。

「子どもがいない保育者」「結婚していない保育者」のように、「〜ない人」という否定的なまなざしを向けるのでなく、「命の奇跡を経験している保育者」「子どもへの情熱豊かな保育者」のように、保育者の尊厳を肯定的に、また重層的に見いだすまなざしへの変化です。考えてみればこれは、子どもに対するまなざしと同じです。「あれもできない子」「これもできない子」というまなざしで保育するのではなく、「こんな面も、あんな面もあるんだ」と肯定的に子どもを見つめる保育の大切さは、改めて指摘するまでもありません。

同じ人間観を、保育者同士や大人同士でも培いたいな、と切に願います。一人ひとりの保育者が、さまざまな思いを抱えながら生活する姿が、子どもの前にあること。お互いの存在を、ありのまま尊重し合い、重層的に受け入れ合う大人の姿が、子どもの前にあること。これこそが、子どもの育ちにとって何より貴重なことなのではないでしょうか。

（上越教育大学准教授）

＊この連載は、今回で終了いたします。